慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会心理学の基盤を裾野から確認する：メタ分析と追試による再現性検証
Sub Title	Building the groundwork for social psychology : meta-analyses of unpublished studies in Japan and direct replications
Author	平石, 界(Hiraishi, Kai) 三浦, 麻子(Miura, Asako) 樋口, 匡貴(Higuchi, Masataka) 藤島, 喜嗣(Fujishima, Yoshitsugu)
Publisher	
Publication year	2025
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2024.)
JaLC DOI	
Abstract	社会心理学における再現性問題に対処すべく、日本国内の学会発表論文に対する系統的レビューを実施した。その結果、実質的に査読を経ない学会発表であっても、研究者自身が統計的有意性にもとづき結果を選択的に報告することで、公刊バイアスが生じていることが示された。欧米における主要研究の事前登録付き追試を複数実施し、知見の通文化的な一般化可能性と頑健性を検証した。追試研究を学部教育に接続することで、オープンサイエンスの普及に資するとともに、再現性危機の10年を総括する包括的レビューを通じて、今後の心理学のあり方について検討した。 To address the reproducibility crisis in social psychology, we conducted a systematic review of conference proceedings from major domestic academic societies in Japan. Our analysis revealed that even in venues without peer review, publication bias arises due to researchers selectively reporting statistically significant findings. We also carried out multiple preregistered replications of influential studies originally conducted in Western contexts, thereby examining the cross-cultural generalizability and robustness of their findings. By integrating these replication efforts into undergraduate education, we contributed to the dissemination of open science practices in psychology. Furthermore, through a comprehensive review summarizing a decade of the reproducibility crisis, we offered recommendations for the future direction of psychological research.
Notes	研究種目：基盤研究 (B) (一般) 研究期間：2019～2023 課題番号：19H01750 研究分野：社会心理学
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_19H01750seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　７ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｈ０１７５０

研究課題名（和文）社会心理学の基盤を裾野から確認する：メタ分析と追試による再現性検証

研究課題名（英文）Building the groundwork for social psychology: Meta-analyses of unpublished studies in Japan and direct replications

研究代表者
平石　界（Hiraishi, Kai）

慶應義塾大学・文学部（三田）・教授

研究者番号：５０３４３１０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　15,630,000円

研究成果の概要（和文）：社会心理学における再現性問題に対処すべく、日本国内の学会発表論文に対する系統的レビューを実施した。その結果、実質的に査読を経ない学会発表であっても、研究者自身が統計的有意性にもとづき結果を選択的に報告することで、公刊バイアスが生じていることが示された。欧米における主要研究の事前登録付き追試を複数実施し、知見の通文化的な一般化可能性と頑健性を検証した。追試研究を学部教育に接続することで、オープンサイエンスの普及に資するとともに、再現性危機の10年を総括する包括的レビューを通じて、今後の心理学のあり方について検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、信頼性の高い心理学研究のあり方を実践を通じて確立することで、その学問の基盤を強化することを目指したものである。2010年代の再現性の危機は心理学の科学的信頼性を揺るがすものであった。公認心理師という心理職の国家資格の存在を鑑みても、自らの学問体系の信頼性を担保することは心理学者の責務である。本研究では、国内学会における研究報告の歪み、海外著名研究の国内における再現性の確認、研究実践の改善を目指すさまざまな試みのレビュー、学部生へのオープンサイエンス教育を通じて、再現性と透明性を重視する心理学研究文化の醸成を試みた。これにより心理学が社会に貢献する学問であるための基盤の整備に寄与した。

研究成果の概要（英文）：To address the reproducibility crisis in social psychology, we conducted a systematic review of conference proceedings from major domestic academic societies in Japan. Our analysis revealed that even in venues without peer review, publication bias arises due to researchers selectively reporting statistically significant findings. We also carried out multiple preregistered replications of influential studies originally conducted in Western contexts, thereby examining the cross-cultural generalizability and robustness of their findings. By integrating these replication efforts into undergraduate education, we contributed to the dissemination of open science practices in psychology. Furthermore, through a comprehensive review summarizing a decade of the reproducibility crisis, we offered recommendations for the future direction of psychological research.

研究分野：社会心理学

キーワード：再現性　追試　オープンサイエンス　公刊バイアス　疑わしい研究実践　メタ分析

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

社会心理学が蓄積してきた「基盤」は頑健なのだろうか。頑健さが確からしい部分と、確かでない部分、さらには脆弱さが確かな部分はあるのだろうか。そのことを確認しない限り、我々は社会心理学を前進させることができない、前進させる資格がないのではないか。これが本研究課題の取り上げる「問い」であった。Bem (2011)の超能力研究出版に端を発する「再現性危機」は、主要雑誌に掲載された 100 研究の組織的追試における低い再現率（< .5）の報告（Open Science Collaboration, 2015, *Science*）によって、いよいよその深刻さが顕になった。並行して低い再現率の「犯人探し」が行われ、様々な「問題のある研究慣習」が指摘され（藤島・樋口, 2016）、「治療」のための研究計画の事前登録制度、直接的追試の実施が提案され、実行に移されてきた（池田・平石, 2016）。その結果、自我消耗、顔面フィードバック仮説、特性プライミング、目の画像による向社会性の向上など、専門書や教科書はもちろん、一般メディアでも紹介され、消費されてきた効果の頑健性に疑問を投げかける追試報告が相次ぐこととなった。教科書に掲載され続けてきたような古典的業績についてまで、その頑健性や意味が問われている状況で、私たちは何を「社会心理学における確実な知見」として発信することができるのか。自信を持って語ることのできる社会心理学の知見は何なのか確認しなければならない。その基盤の上に社会心理学を再構築しなければならない。それが本研究課題を立案した背景である。

２．研究の目的

本研究の究極的な目的は、社会心理学の研究者がその創造性を存分に発揮して研究を推進するための、依って立つ基盤を固めることであった。そのために、日本の社会心理学界が蓄積してきた資源をもって、再現性危機からの社会心理学の再構築という動きに、独自の貢献を果たすことを目的とした。具体的には、国内学会の年次大会ごとに作成される学会大会発表論文集の分析を通じて、日本国内においてどのようなテーマについて豊富かつ質の高い知見が蓄積されているかを明らかにすることが目指された。また、重要テーマについて事前登録付きの追試を実施することを通じて、知見の頑健さにかんする情報を蓄積することも目指された。その際に、研究マテリアリル、収集データ、分析スクリプト等を公開するオープンサイエンスを推進することで、日本という独自の文化圏における社会心理学の研究データを、国内外から二次利用が可能な形で蓄積・公開することで国際的な貢献を果たすことも目標とされた。加えて、これらの活動を学部ならびに大学院教育と連携させることで、社会心理学を担う未来世代に対しての、現代的で再現性の高い研究実践のあり方を教育するプログラムを模索することも、本研究の目的の一部を形成していた。

３．研究の方法

(1)　日本国内の社会心理学者にとって中心的な研究報告機会を形成していると考えられる日本心理学会ならびに日本社会心理学の年次大会における大会報告論文を対象とした系統的レビューを実施した。これらの年次大会でのポスター発表では従来、A4 で 2 段組 1 ページの大会報告論文の提出が義務付けられている。そのため大会で報告された研究について、研究デザイン、サンプルサイズ、検定統計量などメタ分析に資する情報を抽出することが可能と考えられた。他方でこれらの大会報告論文においては、研究内容の新奇さや独創性を基準とした査読による選別が行われていない現状がある。そのため大会報告論文のアーカイブには、日本国内で実施された社会心理学の研究が、公刊バイアスの影響を大きく受けずに蓄積されていると考えられた。この国内社会心理学のいわば裾野をなす研究蓄積を対象としてメタ分析を行うことが目指された。

(2)　各研究分担者が重要と判断した研究テーマについて、事前登録を踏まえた追試研究を実施した。仮説、研究デザイン、サンプルサイズ、サンプル除外規定、主たる分析方針、理論的な予測を事前登録することにより、分析結果を見ながらのサンプルサイズ調整（optional stopping）や共変量や従属変数の操作的定義の恣意的な決定、サンプルの恣意的な除外といった疑わしい研究実践（Questionable Research Practices, QPR）を排除しつつ、先行研究で主張された効果の頑健性をテストすることが期待された。事前登録によって、取得データへの探索的分析を、確証的分析と切り分けて報告することも可能となる。追試研究を大学院ならびに学部の教育プログラムと連携させることで、QRP を防ぐ現代的な心理学研究の実践のありようを学生に教育することも期待された。

４．研究成果

(1)　日本心理学会と日本社会心理学会の 2013 年ならびに 2018 年の大会報告論文のうち、社会心理学の実験研究を行っているものを抽出し z カーブ分析を実施した（Hiraishi, Miura, Higuchi, Fujishima, Nakamura, & Suyama,2024）。z カーブ分析は報告された研究の p 値を z 値に変換し、その分布を検討する。p 値から変換した z 値は帰無仮説が正しい時に平均 0 の正規分

布に従い、帰無仮説が間違っている場合には、検定力に応じて分布の中心が右側に動くという性質を持つ。この性質を利用し、報告された p 値から変換した z 値の分布を見ることによって、もともとの研究が持っていた無条件検定力を逆に推定することが可能となる（Bartoš & Schimmack, 2022）。この無条件検定力と、報告されている研究に占める有意な結果の割合を比較することで、有意でない研究が公刊されないという公刊バイアスの大きさを推定することが可能となる。

2013 年の大会報告論文について、実施された全ての研究の平均検定力（Expected Discovery Rate, EDR）は 7%と推定された一方で、分析対象となった研究のうち有意であったものの比率（Observed Discovery Rate, ODR）は 76%であった（図 1）。これは統計的に有意な結果が得られなかったために報告されずにお蔵入り（file-drawer）となっている研究が大量に存在することを示唆している。5 年後の 2018 年の大会報告論文においても EDR は 13%、ODR は 64%であり、若干の改善は見られたものの、依然として未報告の研究が多くあることが示された。これらの結果は査読によって選別される恐れがほとんどない大会発表の場であっても、社会心理学者が統計的に有意な結果を選択的に報告（selective reporting）していることを意味する。実質的に査読のない状況における選択的報告が生じていることを明白に示した研究は国内外を通じて前例がなく、メタ分析による母効果量の推定に多大な影響をあたえる公刊バイアスの発生機序を明らかにする上で、大きな貢献を与えるものであった。

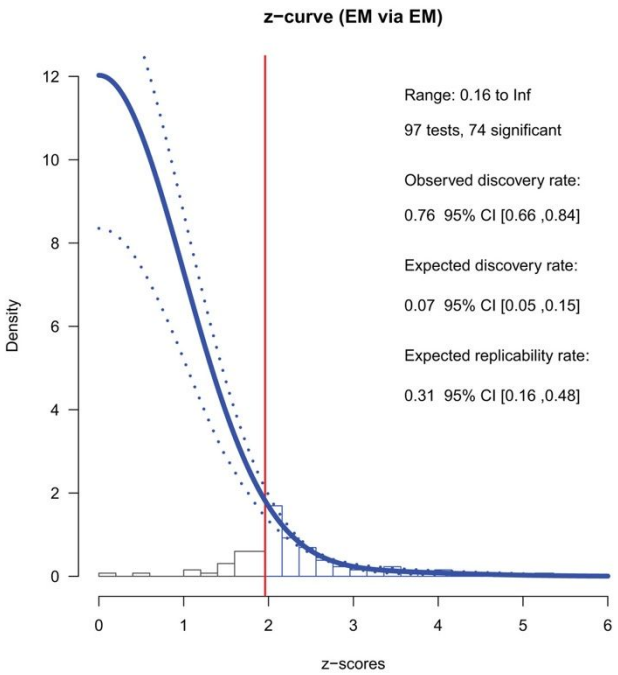

図 1．2013 年大会報告論文の z カーブ分析．報告論文の z 値のヒストグラムと、推定された z カーブが描かれている。実施された研究が全て報告されていれば、z カーブとヒストグラムが一致するはずだが、実際には大きな乖離が見られる。

(2)　社会心理学分野において重要と考えられるテーマについて行った追試研究のうち主要なものについて紹介する。

①　結末情報が幸福度判断に与える影響についての Diener et al.（2001)の事前登録つき直接的追試（藤島, 2025）では、オリジナル研究の結果の再現だけでなく、直接的追試の意義についての検討も行った。オリジナル研究に倣った参加者内要因デザインによる追試では結果が再現された一方で、敢えて参加者間要因デザインに要因計画を変えた追試では結果が再現されないことを確認することによって、オリジナル研究では言及されていなかった潜在的な調整変数が働いていることを示した。このことは、オリジナル研究において理論上重要だと考えられる手続きのみを複製する直接的追試（Zwaan et al., 2017)をいくら重ねたとしても、そのことによって理論がそのまま支持されるわけではないことを意味する。直接的追試にさまざまな改善点を加えた研究を重ねることが理論の修正を促すことに繋がることを明らかにした。

②　誤った合意性効果として引用されることが多いものの日本では効果が確認されていなかった Krueger & Clement（1994)の事前登録つき直接的追試を行い、知見の頑健性と一般性を検討した（藤島, 2023）。従来の知見がある程度まで再現されたが、異なる部分もあることが指摘された。頻繁に引用される著名研究であっても、その頑健性と一般化可能性を検証する必要のあることを改めて示した。

③　非道徳的な人物からの利益提供に対して感謝を感じにくくなるという Yu et al.（2022）の知見に対して概念的追試を行い，どのような内容での非道徳性（配慮，公正，忠誠など）がその人物への感謝の程度に影響するのかを検討した（山本・三沢・鈴木・富澤・植田・上坂・樋口, 2024）。オリジナル研究の知見をより精緻にする結論が得られたという点で，概念的追試として成功例であったと言える。本研究の第 2〜第 6 著者は学部 3 年のゼミ活動として本研究に取り組んだものであり、事前登録に加え、研究マテリアルや研究データの公開といったオープンサイエンスの実践を学部教育に組み込むことができた点で、研究者教育という面においても大きな意義を持つものであった。

④　権力者に対する感謝が，その人物による不正を許すことを媒介して告発を抑制するという Ksenofontov & Becker（2019)の直接的追試を行った。オリジナル研究の結果が再現されたことによって知見の頑健性が確認できたことに加え、参加した学部学生がサンプルサイズ設計、事前登録を行い、分析においても R コードを共有しつつ研究実践を進めることできた。本プロジェクトにおいて、オープンサイエンスにもとづく心理学実践の教育手法が着実に進展したことを示す例と言える。

⑤　自由意志信念を低下させると援助行動が抑制されるという Baumeister, Masicampo, & DeWall(2009)について、操作と援助行動の抑制の間に心理的リアクタンスが介在する可能性を検証するための概念的追試を試みた。最初の研究では、オリジナル研究と同じ実験操作が、そもそも狙い通りの自由意志信念の低下をもたらさず、実験操作が失敗となった。文化差の可能性を考え日米英において再度の実験を行ったが、やはり実験操作が機能しないという結果となった。追試研究において、そもそもの実験操作が機能しているか確認することが重要であることは、本研究のオリジナル著者の一人である Baumeister 本人が指摘するところである(Baumeister, Tice, & Bushman, 2022)。著名研究の知見や手続きをベースにおいた研究であっても、その頑健性の丁寧な確認が必要であることを、改めて示すものと言える。
⑥　これらの追試研究においては、研究実施前の事前登録および研究実施後の研究マテリアルやデータ、分析コードの公開に積極的に取り組むことで、国内の心理学コミュニティにおけるオープンサイエンスへの取り組みを促進する効果があったと考えている。

(3)　教育・啓発プログラム開発
①　上述したように追試研究の実施を学部生教育と連結することで、信頼性革命を踏まえた現代的な心理学の研究実践の教育プログラム開発にも取り組んだ。事前登録や研究実施後のデータやマテリアル、分析コードの公開という手続きは、再現性危機を踏まえてその重要性が明らかんになった一方、従来的な心理学実践においては必ずしも重視されてこなかった。そのため、これらの新しい手続きを学部教育に組み込むためには、さまざまな試行錯誤が求められた。それらの成果を、心理学研究法テキストへの寄稿（三浦, 2022)、プログラム開発の報告論文（樋口, 2025; 平石, 2024）という形で公開した。
②　国立研究開発法人科学技術振興機構による研究倫理教育映像教材の作成に平石と三浦が監修者として携わった（国立研究開発法人科学技術振興機構, 2025)。疑わしい研究実践（QRP)、特に結果を見てからの仮説の後付け（Hypothesizing After the Results are Known, HARKing）が、関係者（研究室主催者、研究員、院生）の誰にも科学を毀損しようとの悪意がなくとも生じてしまうことがあることを紹介した。
③　これらの活動を通じ、心理学界が再現性危機を踏まえて、社会からの信頼を再び得るために構想し実装してきた新しい研究実践のあり方を広く広報し、また次世代の研究者に伝えることに寄与したと考えている。

(4)　再現性危機にかんする包括的なレビューを行った。再現性危機を受けた心理学研究実践のリフォームを目指して数多くの提案と実践が行われた。こうした信頼性革命（credibility revolution）の運動を受けた再現性の高い研究実践についての情報交換を目指す世界的な草の根運動である ReproducibiliTea に参加し、その東京支部である ReproducibiliTea Tokyo を立ち上げた（平石・池田, 2023)。活動を通じた文献レビューを踏まえ、再現性危機の 10 年間を総括するレビュー論文を報告した（平石・中村, 2022)。再現性危機への処方箋として提案された事前登録や登録研究（registered report）といった手続きを紹介するだけでなく、事前登録付きのマルチサイト大規模直接的追試プロジェクト、同一データを複数の分析チームが同時に分析する多数の研究者（many analysts）アプローチ、データ分析における多数の可能性を網羅的に同時検証する多元宇宙分析（multiverse analysis）や仕様カーブ分析（specification curve analysis）について、研究仕様空間（research specification space）の探索という視点から包括的な整理と紹介を行った。その上で再現性危機の根底には、心理現象を巡る複雑さから起因する一般化可能性問題（Yarkoni, 2020）が存在することを指摘した。国内はもとより、国際的に見ても、これだけの包括的なレビューは行われていない。また、再現性危機の根本的な原因を探り、その上で今後の心理学研究の方向性について提言を試みる論文となっており、本研究プロジェクトの当初への一定の回答を与えるものであったと考えている。

＜引用文献＞
本研究プロジェクトで実施した文献に限り記載する。
Hiraishi, K., Miura, A., Higuchi, M., Fujishima, Y., Nakamura, D., & Suyama, M. (2024). A systematic review of conference papers presented at two large Japanese psychology conferences in 2013 and 2018: did Japanese social psychologists selectively report p < 0.05 results without peer review? PeerJ, 12, e16763. https://doi.org/10.7717/peerj.16763
藤島喜嗣. (2025). Effects of Adding End Information on the Happiness Judgment:結末情報の付加が幸福度判断に及ぼす影響: Replication of the Study by Diener, Wirtz, & Oishi (2001) with a Different Factorial Design— 異なる要因配置による Diener, Wirtz, & Oishi (2001) の追試 —. Quarterly Journal of Marketing, 45(1), 44-54. https://doi.org/10.7222/marketing.2025.001
山本晶友, 三沢悠貴, 鈴木蓮., 富澤茉衣, 植田綾那, 上坂千春, & 樋口匡貴. (2024). 利益提供者の非道徳性に対する感謝の感受性――Yu et al. (2022) の事前登録付き概念的追試―

一．感情心理学研究，31(2)，50-58．https://doi.org/10.4092/jsre.31.2_50
三浦麻子．(2020)．心理学研究法．放送大学教育振興会．https://ua-book.shop-pro.jp/?pid=159283743
樋口匡貴．(2025)．再現可能性問題に関する教育実践の報告および今後の展開：社会心理学研究室 2023 年度 3 年ゼミでの実践．上智大学心理学年報，49，47-54．https://researchmap.jp/HIGUCHI_MA/published_papers/49927743
国立研究開発法人科学技術振興機構．(2025，May 20)．「倫理の空白IV」研究活動のグレーゾーン 2 人文・社会科学編．JST 研究倫理教育映像教材．https://www.jst.go.jp/kousei_p/measuretutorial/mt_movie/mtm_gapsinethics1_2.html
平石界．(2024)．公開データを用いた心理学卒業研究の提案．哲學，152(152)，117-145．https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000152-0117
平石界．，& 池田功毅．(2023)．オンライン時代の研究コミュニティ運営： ReproducibiliTea Tokyo 繁盛記．認知科学，30(2)，146-153．https://doi.org/10.11225/cs.2023.004
平石界．，& 中村大輝．(2022)．心理学における再現性危機の 10 年：危機は克服されたのか、克服され得るのか．科学哲学，54(2)，27-50．https://doi.org/10.4216/jpssj.54.2_27

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計24件（うち査読付論文　8件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　20件）

１．著者名 藤島 喜嗣	４．巻 45
２．論文標題 結末情報の付加が幸福度判断に及ぼす影響	５．発行年 2025年
３．雑誌名 マーケティングジャーナル	６．最初と最後の頁 44～54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.7222/marketing.2025.001	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 藤島 喜嗣、山田 一成	４．巻 40
２．論文標題 多次元完全主義認知尺度の妥当性：公募型Web調査データを用いた検討	５．発行年 2024年
３．雑誌名 社会心理学研究	６．最初と最後の頁 139～151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14966/jssp.2023-016	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山本 晶友，三沢 悠貴，鈴木 蓮.，富澤 茉衣，植田 綾那，上坂 千春，樋口 匡貴	４．巻 31
２．論文標題 利益提供者の非道徳性に対する感謝の感受性	５．発行年 2024年
３．雑誌名 感情心理学研究	６．最初と最後の頁 50～58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4092/jsre.31.2_50	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 樋口 匡貴	４．巻 49
２．論文標題 再現可能性問題に関する教育実践の報告および今後の展開：社会心理学研究室2023年度3年ゼミでの実践	５．発行年 2025年
３．雑誌名 上智大学心理学年報	６．最初と最後の頁 47-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 樋口 匡貴 ， 五十嵐 真子 ， 大井 彩衣 ， 佐藤 奏 ， 栖原 恵海 ， 中久喜 亜美	4．巻 48
2．論文標題 聴覚媒体の違いによる説得効果への影響：Lieberman et al. (2022) の概念的追試	5．発行年 2024年
3．雑誌名 上智大学心理学年報	6．最初と最後の頁 123-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 平石界	4．巻 152
2．論文標題 公開データを用いた心理学卒業研究の提案	5．発行年 2024年
3．雑誌名 哲學	6．最初と最後の頁 117-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Murakami Michio、Hiraishi Kai、Yamagata Mei、Nakanishi Daisuke、Miura Asako	4．巻 10
2．論文標題 Belief in just deserts regarding individuals infected with COVID-19 in Japan and its associations with demographic factors and infection-related and socio-psychological characteristics: a cross-sectional study	5．発行年 2022年
3．雑誌名 PeerJ	6．最初と最後の頁 e14545～e14545
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.7717/peerj.14545	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 樋口 匡貴，岸間 春佳，川村 舞子，佐々木 みな，鈴木 鈴，松永 栞奈	4．巻 47
2．論文標題 感情開示が被害者避難減少に及ぼす影響：Harber, Podolski, & Williams (2015) の追試	5．発行年 2022年
3．雑誌名 上智大学心理学年報	6．最初と最後の頁 91-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 樋口 匡貴	4．巻 7
2．論文標題 それは対岸の火事か、他山の石か：心理学における再現可能性危機と対策	5．発行年 2022年
3．雑誌名 上智大学総合人間科学部看護学科紀要	6．最初と最後の頁 3-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三浦 麻子	4．巻 92
2．論文標題 心理学における追試――これまでとこれから――	5．発行年 2022年
3．雑誌名 科学	6．最初と最後の頁 791-795
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 平石 界	4．巻 92
2．論文標題 心理学研究のエビデンスとしての質を考える	5．発行年 2022年
3．雑誌名 科学	6．最初と最後の頁 806-810
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 平石 界、池田 功毅	4．巻 30
2．論文標題 オンライン時代の研究コミュニティ運営： ReproducibiliTea Tokyo繁盛記	5．発行年 2023年
3．雑誌名 認知科学	6．最初と最後の頁 146～153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11225/cs.2023.004	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 平石 界、中村 大輝	4．巻 54
2．論文標題 心理学における再現性危機の10年	5．発行年 2022年
3．雑誌名 科学哲学	6．最初と最後の頁 27～50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4216/jpssj.54.2_27	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 藤島喜嗣、髙橋幸子、江利川滋、山田一成	4．巻 22
2．論文標題 日本語版認知欲求尺度の公募型Web調査における妥当性	5．発行年 2020年
3．雑誌名 昭和女子大学生活心理研究所紀要	6．最初と最後の頁 13-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Hiraishi Kai、Miura Asako、HIGUCHI Masataka、Fujishima Yoshitsugu、Nakamura Daiki、Suyama Masaki	4．巻 -
2．論文標題 Systematic Review of Conference papers in Social Psychology (stage 1 protocol revision 1)	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Psyarxiv	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.31234/osf.io/s8t7q	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三浦麻子	4．巻 62
2．論文標題 「事前登録の事前審査」経過報告と所感	5．発行年 2019年
3．雑誌名 心理学評論	6．最初と最後の頁 272-280
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24602/sjpr.62.3_272	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 平石界・斎藤彩乃・西尾眞紀・藤井那侑・森峻人	４．巻 62
２．論文標題 配偶者選好における身体的魅力重視度の男女差は消えたのか	５．発行年 2019年
３．雑誌名 心理学評論	６．最初と最後の頁 244-261
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24602/sjpr.62.3_244	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計16件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 平石界・三浦麻子・中西大輔・Andrea Ortolani・山縣芽生・三船恒裕・李楊
２．発表標題 Covid-19パンデミック下での行動免疫と内外集団への態度：日本、中国、米国、英国、伊国での3年間のWeb調査から
３．学会等名 日本社会心理学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 平石界
２．発表標題 心理学の成果の社会への適切な発信について
３．学会等名 日本心理学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 藤島喜嗣
２．発表標題 サンプルサイズ・ヒューリスティックと推測の保守性：Krueger & Clement (1994)の直接的追試
３．学会等名 日本社会心理学会
４．発表年 2022年

１．発表者名
藤島喜嗣

２．発表標題
結末情報の付加が人生幸福度評価に及ぼす影響 (2)公募型 Web 調査を用いた追試

３．学会等名
日本心理学会

４．発表年
2022年

１．発表者名
平石界、三浦麻子、樋口匡貴、藤島喜嗣、中村大輝、須山巨基

２．発表標題
日本心理学会と日本社会心理学会における大会発表論文の系統的レビュー：2013年と2018年の社会心理学系の発表を対象に

３．学会等名
日本心理学会第85回大会

４．発表年
2021年

１．発表者名
藤島喜嗣、石井萌波、白石まどか、宮本祐里

２．発表標題
結末情報の付加が人生幸福度評価に及ぼす影響:異なる要因配置によるDiener, Wirtz, & Oishi(2001)の追試

３．学会等名
日本心理学会第85回大会

４．発表年
2021年

１．発表者名
山田一成、藤島喜嗣

２．発表標題
公募型Web調査における特性的自己効力感尺度の妥当性(1) 成人対象調査を用いた構造的側面の検討

３．学会等名
日本社会心理学会第62回大会

４．発表年
2021年

１．発表者名
藤島喜嗣、山田一成

２．発表標題
公募型Web調査における特性的自己効力感尺度の妥当性(2) 人生満足感ならびにビッグファイブ特性との関連

３．学会等名
日本社会心理学会第62回大会

４．発表年
2021年

１．発表者名
平石界、三浦麻子、中西大輔、Andrea Ortolani、三船恒裕、李楊

２．発表標題
行動免疫は内外集団への態度を予測するか：日本、中国、米国、英国、伊国でのWeb調査から

３．学会等名
日本社会心理学会第62回大会

４．発表年
2021年

１．発表者名
Hiraishi, Kai; Miura, Asako; Nakanishi, Daisuke; Ortolani, Andrea; Yamagata, Mei; Li, Yang; Mifune, Nobuhiro.

２．発表標題
Behavioral Immune System amidst COVID-19: Data from Japan, US, UK, Italy, and China in 2020 and 2021

３．学会等名
32nd Annual conference for Human Behavior and Evolution Soceity（国際学会）

４．発表年
2021年

１．発表者名
平石界

２．発表標題
来月からできる!? 事前登録つき直接的追試

３．学会等名
日本教育心理学会第63回

４．発表年
2021年

１．発表者名
三浦麻子、平石界、中西大輔、Ortolani Andrea.

２．発表標題
新型コロナウイルス感染禍に対する態度の国際比較: 「自業自得」「自粛警察」は日本にユニークなのか.

３．学会等名
日本社会心理学会第61回大会

４．発表年
2020年

１．発表者名
平石界、三浦麻子、中西大輔、Andrea Ortolani、三船恒裕、李楊

２．発表標題
COVID-19パンデミック下における行動免疫データ：日本、米国、英国、伊国、中国におけるWeb調査

３．学会等名
日本社会心理学会第61回大会

４．発表年
2020年

１．発表者名
樋口匡貴・吉野ゆい

２．発表標題
環境的宗教プライミングによる協力行動への影響 ―宗教属性を踏まえた検討―

３．学会等名
日本社会心理学会第60回大会

４．発表年
2019年

１．発表者名
平石界

２．発表標題
家族と男女と互恵性の進化心理学を追試する（3）

３．学会等名
日本社会心理学会第60回大会

４．発表年
2019年

１．発表者名
Kai Hiraishi, Masataka Higuchi, Yoshitsugu Fujishima, and Asako Miura

２．発表標題
A Collection of Replication Attempts in Japan: Mating, Family, Survival, and Social exchange.

３．学会等名
Human Behavior and Evolution Society 31st Annual Conference（国際学会）

４．発表年
2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名	４．発行年
安藤 寿康、藤澤 啓子、野嵜 茉莉	2021年
２．出版社	５．総ページ数
創元社	160
３．書名	
家庭環境と行動発達	

１．著者名	４．発行年
三浦 麻子	2020年
２．出版社	５．総ページ数
放送大学教育振興会	240
３．書名	
心理学研究法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Covid-19下の社会で社会心理学者は何を思う？
https://note.com/kaihiraishi/m/mceabd2c2e7ff
ReproducibiliTea Tokyo
https://note.com/kokiikeda/m/mb95e3656945b
基盤研究(B)(2019-2024)
https://sites.google.com/view/asarin1003/replicability/kibanb
恋人選びで「男は見た目、女は経済力を重視する」説は、本当なのか
https://gendai.ismedia.jp/articles/-/69538
プレレジプレレビュー体験記
https://note.com/kaihiraishi/n/n1944e91ddabd
プレレジをプレレビューした体験記
https://sites.google.com/view/asarin1003/replicability/JCORS20191225?authuser=0

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	三浦　麻子 (Miura Asako) (30273569)	大阪大学・大学院人間科学研究科・教授 (14401)	
研究分担者	樋口　匡貴 (Higuchi Masataka) (60352093)	上智大学・総合人間科学部・教授 (32621)	
研究分担者	藤島　喜嗣 (Fujishima Yoshitsugu) (80349125)	昭和女子大学・生活機構研究科・教授 (32623)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関